

獅子頭の陶枕 国内で初出土

平安京跡

京都市中京区の平安京跡で、中国・唐代に製造された陶器の枕（陶 枕）の飾りとみられる獅子の頭が見つかった。古代学協会・古代学研究所（同市中京区）が8日、発表した。唐代を代表する窯として知られる中国・湖南省の長沙窯で、9世紀前半につくられたと考えられ、遣唐使が持ち帰ったとみられる。獅子形枕の出土は国内で初めて。

島津製作所の新工場建設に伴う調査で、直径1.5メートルの井戸の中（深さ約80センチ部分）から出土した。獅子の頭は縦約6センチ、横8センチのこぶし大。黄褐色で青みがかった釉薬をほどこし、目や鼻、たてがみなどは茶色の釉薬で描かれ、口に鮮やかな朱が塗られている。同研究所によると、獅子形の陶枕は、長沙窯で5点が確認されているという。

奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの巽淳一郎・国際遺跡研究室長（古代陶磁器）は「平安貴族が中国の文物や制度など新しい文化を採り入れようとしていたことを実証する例だ」と話している。



平安京跡からみつかった陶製の枕の飾りと思われる獅子頭



平安京跡からみつかった獅子頭の枕の復元予想図＝古代学協会・古代学研究所提供

（朝日新聞 2005.3.9 朝刊 第1面 13版）